

ヨハネによる福音書 1:1-8

1. 「初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。この方は、初めに神とともにおられた。(1:1-2)」
 - a. ヨハネは福音を神としてのイエスを紹介する形で書き出している。多くの方は「初めに」というフレーズを聞くと創世記 1:1 を思い浮かべるだろう。ヨハネは意図的に天地創造とこの福音の語り方を掛け合わせているのである。
 - b. ヨハネはこの書き出しの部分で 3 つの主張をしている。1) 時が存在する前から「ことば」はあった。2) 「ことば」と神とは別の存在である。3) 「ことば」は神とは別の存在でありながら同一である。ヨハネはこの後で「ことば」とはイエスご自身であることを明らかにする。
 - c. 「ことば」という表現についてはクリスチャンの間でも混乱がある。一部のクリスチャンは「ことば」は聖書のことだと解釈するが、聖書は聖霊により人の手を通してできたものなのでここでの「ことば」はみことばではない。
2. 「すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。(1:3)」
 - a. みことば全体を通して、天地創造は神の手によるものであることが読み取れるが、この世の考えでは世界は偶然と進化によってできたとされている。ヨハネは必ずしも進化論に対抗しようとしたわけではないかもしれないが、神はご自身が造られたこの世界に対して完全な支配権をお持ちだとヨハネは主張している。
 - b. イエス様は天地創造の仲介者であるだけでなく、コロサイ 1:17 によればすべてを支配される方である。万物は御子によって造られ、御子によって成り立っている。
 - c. 神がすべてを支配されているということに私たちの平安がある。私たちは無秩序の世界ではなく神の主権のもとに成り立つ世界に生きている。
3. 「この方にいのちがあった。このいのちは人の光であった。(1:4)」
 - a. イエス様はいのちの創造者である。いのちを持っているだけでなく私たちに永遠のいのちを与えるために来てくださった。福音に一貫して見られるメッセージは、この世のいのちは終わりではなく、最終的な目的地にたどり着くまでの道だということである。
 - b. 天地創造の始まりでは神が人間にいのちを吹き込み人は生きるものとなった。ここでのいのちとは光である。
 - c. 天地創造の物語では禁断の実によってこの世に死が入ったと教えている。この実を食べた時にアダムとエバはすぐに死んだのではなく裸であることに気付いた、ということは興味深い。ここで死が入った時に彼らが失ったものはいのちの光であったと信じる者もいる。イエス様が来てくださったのは、この光といのちを回復して下さるためである。
4. 「光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった。(1:5)」
 - a. この世に初めて光が来た時はバプテスマのヨハネがその方をあかしする役目を務めた。今日、教会がイエス様の使節であり、あかしをする役割を担っている。あかしするだけでなく神と人の和解のための手助けをする。
 - b. イエス様が示したいのちの光はこの世には理解されなかった。「すべての人を照らすそのまことの光が世に来ようとしていた。この方はもとから世におられ、世はこの方によって造られたのに、世はこの方を知らなかった。この方はご自分のくににいられたのに、ご自分の民は受け入れなかった。(ヨハネ 1:9-11)」この世の人々はイエス様を理解せず、結果的に十字架に付けた。
 - c. しかしやみも彼には打ち勝たなかった。イエス様は十字架に付いたが、これも神の全能なる計画の一部であった。イエス様の十字架を通して、この方を受け入れ、その名を信じた人々には神の子どもとされる特権が与えられる。(ヨハネ 1:12)